清代の移住民社会

——嘉慶白蓮教反乱の基礎的考察——

山田賢

【要約】一七世紀末から一八世紀末にかけて、湖広を中心とする先進開発地域からは大量の移住民が析出され、四川・湖北・陝西境界地区（所謂「三省交界地帯」）へと流入した。一七九六年（嘉慶元年）、この地域では嘉慶白蓮教反乱が勃発したが、反乱軍の出自は移住民にあったとされている。本稿の課題は、第一に移住民社会がある秩序へと収束される過程を明らかにすることであり、第二にその過程において形成された矛盾——即ち嘉慶白蓮教反乱を用意した社会条件を見極めることにある。

移住民の取り結ぶ社会関係は、同郷結合から同族結合へと帰結し、次第に聚居形態を伴う同族集団が誕生する。乾隆年間末頃までにこの中から、平野部における大土地所有・流通ルートの独占を実現する移住民地主が出現した。彼らは同族結合を「宗族」組織として固定せしめる方向を目指したが、一方、山間部の被圧迫集団は、その族的結合自体さえ危機に瀕しつつあった。こうした同族集団間の分極化が、嘉慶元年における大規模な社会変動の伏線として存在していたのである。

史林　六九巻六号　一九八六年一一月

はじめに

「移住」——それは中国史上にあって、開発の進展、或いは戦乱による一地方荒廃のつど幾度も繰り返されてきた現象と言ってよい。しかし清代に至り、この現象はとりわけ重大な社会問題として再びクローズ・アップされる。清初以来、人口圧力に悩まされる先進開発地区から周縁（未開発地区）へと向かう移住民の流れは途絶えることがなかったばかりか、

いよいよ巨大なうねりとなって継続された。我々は「移住①」という現象が、それによって誘引される社会変動とともに清代社会の基層を形成する底流として存在し続けたことを認識する必要があるだろう。

十七世紀から十八世紀末にかけて四川・湖北・陝西三省交界地帯の山岳地区へも大量の移住民が流入している。後にこの地方では嘉慶白蓮教反乱が勃発するが、反乱軍構成員の大部分は移住民であったと伝えられる。

本稿の課題とする所は、第一に当該地区における移住民が如何なる社会関係を取り結び、且つそれらの社会関係の総体として如何なる秩序意識に貫かれた地域社会が形成されていくかという点にある。移住民は彼らの生活と利益を保証し得る共同性を模索し、さまざまな社会関係を取り結んでいくだろう。移住民を受け入れた地域社会は、移住民の取り結ぶ社会関係を統合し、新しい秩序体系へ収束されねばならない。換言すれば、移住民の定住とは、彼らの取り結ぶ社会関係が地域社会を構築する秩序の一環として組み込まれていく過程――地域社会の再編――を伴うのである。

嘉慶白蓮教反乱が乾隆期の移住民流入と何らかの内在的連繋を持つことは疑いない。即ち、移住民流入のあとを受け、彼らが取り結んだ諸社会関係を包摂しつつ新たな秩序へ向けて地域社会が再編された際、その渦中で何らかの矛盾が胚胎されたと考えられる。本稿の第二の課題は、移住民社会がある固定した秩序のもとへ収斂されていく過程の中から、嘉慶白蓮教反乱を用意した社会条件を見出すことにある。移住は既に述べたように清代を通して一般的な現象として存在したし、移住民の流入は彼らを受け入れた地域社会に多かれ少なかれ必ず何らかの変容を強いたであろう。しかし嘉慶白蓮教反乱ほど大規模な社会変動は、清代中期における他の移住民社会に例を見ない。即ち、本稿の第二の課題は、(1)清代中期、(2)三省交界地帯における移住民社会の特殊性を明らかにすることによって果たされるであろう。

さて、我が国における本格的な嘉慶白蓮教反乱研究は、鈴木中正『清朝中期史研究②』を以て嚆矢とする。鈴木の著作は、当時の「社会矛盾」――彼は「過剰人口」、「地主商人勢力」及び「官僚」の圧迫といった三点を挙げる――故に、四川・陝西・湖北三省交界地帯への人口流入が著しく増幅されたこと、反乱軍の出自が移住民にあること、を初めて明確に指摘

した。ここに、「移住」という現象を清代中期の社会変動（嘉慶白蓮教反乱）に連接する不可欠の環として位置づける視点が据えられた。

鈴木は、嘉慶白蓮教反乱前夜における移住民社会の状況について、ほぼ完全な「無政府状態」にあったと認め、それ故に白蓮教増殖の基盤を提供したと見る。『清朝中期史研究』により嘉慶白蓮教反乱研究の基点は定まった。これに続く諸研究は、嘉慶白蓮教反乱は移住民社会の内部から醸成されたとする鈴木の指摘を踏まえつつ、反乱主体たる「移住民」の存在形態・意識形態と、「白蓮教」宗教思想とを如何に内在的な論理で繋ぐか、といった作業を更に意識的に鋭く推し進めていった。

先行する鈴木の研究に学びつつ、その批判的継承を目指したものとして、先ず安野省三「清代の農民反乱」[3]を取りあげる必要があろう。安野は、鈴木が移住の第一の原因として取り上げた相対的過剰人口論に対し、「相対的に人口が過剰になったからといって」「劣悪な経済条件の山間部へおのずと人間が移住していくものであろうか」と疑問を呈し、移住を「反動体制に対する農民の拒否反応」として積極的な評価を試みた。従って安野によれば、移住は国家権力の存立基盤である共同体的村落結合からの離脱に他ならず、彼ら移住民は、「宗族的・地縁的結合」を拒否して山内に散居すると認識された。安野は、こうした移住民の存在と意識が、「共同体的な地縁社会や専制君主制の補完物のごとき中央集権国家と、真向から対決する」白蓮教の思想に共鳴していく素地であると考えた。

さて、鈴木・安野両氏が移住地における社会経済的条件の検討を通して、反乱主体の姿を見極めようとしたのに対し、所謂「文化価値的概念」に基づいて嘉慶白蓮教反乱のとらえ直しを計ったのが、小林一美の一連の論攷[4]であった。小林は、嘉慶白蓮教反乱を「構造的負性」の反乱として総括するが、「構造的負性」なる概念について要約、紹介すれば次のようになる。嘉慶白蓮教反乱に参加した反乱主体は、(1)その存在形態について言えば、共同体から排除された「被差別者」（負の存在）であり、(2)彼らの意識は、体制的価値観の底辺に沈殿する情念の世界（負の世界）に導かれつつ「白蓮教」の世

界へ呑み込まれていく。

小林は、嘉慶白蓮教反乱前夜の移住民社会については次のように述べる。「構造的負者」（根無し草としての移住民）は「村落外に独自の社会を形成し、それを仮性共同体」となす、と。即ち、小林は三省交界地帯の社会状況を、「村落共同体」（定住者の社会）と、そこから排除された「負者」（移住民を含む被差別者）が形成していく独自の「仮性共同体」へと収斂されていく分極構造として想定したのである。

はじめに述べたように、本稿の目的は三省交界地帯における移住民社会の実態を検討し、併せて嘉慶白蓮教反乱を用意した社会条件が如何にして生じたかを探るに止まる。従って反乱へと起ち上がった主体自体の検討[5]、及び白蓮教宗教思想の検討は後日に譲らざるを得ず、本稿は上記諸氏の論攷と直接切り結ぶ地平にはない。しかしながら、上記三氏の論にはある共通した問題が存すると思われ、その点については指摘しておきたい。私見によれば、三氏はともに「移住」として現象する生活の一形態と、白蓮教宗教思想を繋ぐことに性急であり過ぎた。即ち、「共同体」的諸関係から切断された根無し草的存在としての「移住民」（確かにそうした一面は否定し難いが）に着目した結果、「定住」＝地域社会形成史への視角が欠落したのである。移住民の析出から定着への過程は、土地獲得への欲求を動機として推進される。従って彼らはもしその欲求が満たされれば、「定住」を完結させ、且つ彼らの生存を保障する共同性の確保へと向かうだろう。

乾隆末頃、三省交界地帯山内へ流入した移住民は数百万人にのぼるとも言われ[6]、当該地区において用意されていた土地開墾・商業交易の利益では、既に彼ら全てを扶養するには足りなくなっていたと思われる。こうした状況の下、当然のことながら移住民の取り結ぶ共同体的関係の範囲は無際限に拡大されはしない。自らの生活と利益を守るために仲間うちの互助を緊密にする一方、それ以外の者には厳しく排他的な集団として完成されるであろう。嘉慶白蓮教反乱を醸成した諸要因は、移住から定住へと向かう潮流のさなかに――即ち、上記のような移住民社会展開の過程において出現するだろう。

移住民の属性は、一面では「流浪」として現象するが、一面では強い「定住」（土地獲得の欲求）への志向を抱き続けることも忘れてはならない。移住民の存在・意識が、白蓮教にとって何らかの親和性を持っていたことは疑いないものの、そこから直ちに邪教＝反乱へと繋がる道が現れるわけではない。繰り返すように、嘉慶白蓮教反乱は、移住から定住へのプロセスにおいて胚胎された。換言すれば、嘉慶白蓮教反乱は、「定住」を目指して孜孜たる努力を続けた一群の移住民が、秩序（定住者の社会体制）を希求しつつ裏切られていく過程であった。

① 近年この方面については優れた研究が現れている。瀬川昌久「村のかたち」（『民族学研究』四七―一、一九八二）、上田信「地域の履歴」（『社会経済史学』四九―二、一九八三）、「地域と宗族」（『東洋文化研究所紀要』九四、一九八四）、北田英人「中国太湖周辺の『塢』と定住」（『史朋』一七、一九八四）、夏井春喜「太平天国後の浙西における客民の問題について」（『近きに在りて』九、一九八六）。なお、明代における三省交界地帯への移住に触れたものに、横田整三「明代における戸口の移動現象について、上」（『東洋学報』二六―一、一九三八）、谷口規矩雄「明代中期荆襄地帯農民反乱の一面」（『研究』三五、一九六五）、大沢顕浩「明末宗教的反乱の一考察」（『東洋史研究』四四―一、一九八五）等がある。

② 愛知大学国際問題研究所、一九五二。現在、燎原書店より再出版。

③ 『岩波講座世界歴史』一二、岩波書店、一九七一。

④ 「構造的負性の反乱」（『歴史学の再建に向けて』四、一九七九）、「中国白蓮教反乱における帝王と聖母」（『歴史学の再建に向けて』五、一九八〇）、「嘉慶白蓮教反乱の性格」（『中嶋敏先生古稀記念論集』上、汲古書院、一九七九）、「斉王氏の反乱」（『続中国民衆反乱の世界』汲古書院、一九八三）。

⑤ 近年中国において進められた檔案史料整理の結果、(1)反乱軍の教派、(2)主な反乱指導者の人脈、についての基本的な事実が明らかにされた。張書才「〈聖武記〉所記白蓮教起義史料辨誤」（『文献』一、一九七九）、張興伯「談談白蓮教襄陽起義軍的布告与口号」（『文献』二、一九八〇）、許曾重・林易「劉之協在川楚陝農民大起義中作用的考察」（『清史論叢』二、一九八〇）、許曾重「試論評価王聡児的幾個問題」（『清史論叢』三、一九八二）、「論川楚陝農民起義軍的両件告示」（『中国農民戦争史論叢』四、一九八二）、王鈺欣「清代中葉白蓮教起義軍的階級階層分析」（『中国農民戦争史論叢』四、一九八二）等がある。しかし、檔案を活用した本格的な嘉慶白蓮教反乱の再検討は、なお今後の課題として残されている。

⑥ 鈴木中正『清朝中期史研究』、七七頁。

第一章　三省交界地帯における移住の概況――予備的考察――

三省交界地帯における地域社会の実態を検証する前に、当該地区への移住状況について概観しておく必要があろう。最

初に、(a)移住盛行の時期、(b)移住民の析出地（出身地）、(c)移住の原因、(d)移住民の帰住地における経済生活について考察を加えておきたい。

（a）移住盛行の時期

およその移住傾向――移住民の量的推移――については、鈴木中正の前掲『清朝中期史研究』によってその大勢を知ることができる。鈴木の見解を要約すれば次の如くなろう。清朝は、張献忠の乱による四川荒廃をうけ、康熙年間までは四川方面への移住を奨励していたが、雍正年間に入ると次第に移住を制限するに至った。にも拘らず一度開始された移住のうねりは些かも衰えることなく、乾隆年間にはより大量の移住民が四川方面を目指すことになる。だが、この頃までに、先行する移住民によって肥沃な四川平原は既に占め尽くされ、後の移住民は次第に四川・陝西・湖北三省交界地帯――厳しい自然環境の下にある山岳地帯であり後に嘉慶白蓮教反乱の舞台となる――へ向かった。

以上の鈴木の見解は地方志等の記述①に照らしてもほぼ全面的に承認し得るものである。しかし、乾隆期に最高潮を迎えたと言われる三省交界地帯への移住が、終息へ向かうのは何時頃だったのだろうか。この課題に対しては鈴木も明確な答えを示していないが、乾隆末から嘉慶初年にかけて山内の開発は飽和状態に達し、それとともに移住民の流入も減少したようである。山内の開発が当時の技術において可能な極限にまで逢着したのは、陝西省南部（秦嶺山中）では乾隆五十年頃、四川東北部（大巴山中）では嘉慶初年と記録される。

乾隆五十年後、深山邃谷、到る処人有りて、寸土も皆耕さる。（嘉慶『続興安府志』巻二、食貨）

教匪の平定自り以来、荒山老林は尽く開墾を行い、地に曠土無し。（道光『巴州志』巻一、風俗）

山林の開墾は、当初「刀耕火種②」と称される焼き畑農法によって進められた。トウモロコシ栽培を主とする焼き畑農法の時期に続き、四川では次第に棚田が形成されていく③が、一方、急峻な山々が連なり、比較的乾燥した気候条件の下にあ

る陝西では、一度、山林を伐採、焼失せしめることは致命的な結果をもたらすことになった。

山民の林を伐り荒を開くに、陰翳は肥沃にして、一・二年の内なれば雑糧は必ず倍なり。四・五年の後に至るに、土は既に挖鬆にして山も又陡峻なれば、夏秋の驟雨は冲洗し、水痕条条として、祗だ石骨存するのみなり。……則ち山民の流れざる能わざるは、地勢、実に之をして然らしむるなり。(嘉慶『漢南続修郡志』巻二一、風俗)

この結果、陝西南部の漢中府では、嘉慶末から道元初年にかけて人口の増加傾向は停止したばかりか、反って道光から光緒にかけて著しい人口の減少を見せている。[4] 際限なき山林の開発は自然環境の破壊と、それに伴う災害をもたらさないわけにはいかなかった。乾隆末から嘉慶初年――それは嘉慶白蓮教反乱の醸成された時期でもある――もはや三省交界地帯山内は、それ以上の移住民を受け入れる余地はなかった。

(b) 移住民の析出地

移住民の析出地については、湖北・湖南・安徽・江西・河南を中心とし、更に四川・陝西・広東・広西等が加わると言われている。[5] しかし、その中でも特に大量の移住民を析出したのが湖北・湖南――即ち洞庭湖を中心とする湖広平原であった。民国『雲陽県志』巻二三、族姓、氏族表――雲陽県は四川省東北部山中に位置する――は、この点について貴重な史料を残している。この氏族表は民国期まで続いた県内有力氏族の一覧表であり、もともと移住民であった場合には、雲陽県へ移住した時期・原藉(析出地)を記している。その中から、乾隆年間に移住した氏族を摘出し、出身地を分類して表(1)に示した。移住民の大部分が湖広平原から析出されたと理解できよう。

湖広が未だ開発の途上にあった明代、湖広は江西から多くの移住民を受け入れたと言われる。[6] しかし、清初に至り湖広が一応開発のピークに達すると、湖広は移住民の析出地となる。つまり、これがここで取り上げる湖広から四川方面(三省交界地帯)への移住に他ならない。更に清末に至ると、四川から貴州方面へと向かう移住の流れを見出し得る。[7] 清代中期

表(Ⅰ) 乾隆期における雲陽県への移住氏族の析出地一覧（計54氏）

武昌 3	武昌府 11	湖北 25	湖広 41	
蒲圻 4				
大冶 3				
興国州 1				
黄岡 4	黄州府 10			
麻城 5				
蘄水 1				
江陵 1	荆州府 1			
咸豊 1	施南府 1			
湖北 2				
零陵 1	永州府 2	湖南 15		
永州 1				
巴陵 1	岳州府 2			
岳州 1				
邵陽 1	宝慶府 2			
新化 1				
長沙 1	長沙府 5			
益陽 1				
湘郷 1				
安化 1				
寧郷 1				
武陵 1	常徳府 2			
桃源 1				
衡州 2	衡州府 2			
湖広 1				

江西 4	その他 計 12
四川 2	
福建 3	
安徽 2	
広東 1	
信封 1	何処なるか不明

における湖広から四川方面への移住も、揚子江を溯上する形で数百年にわたって連続した開発史の一齣として位置づけ得るであろう。しかし、この時期、移住民の析出地たる湖広平原は如何なる固有の社会条件を抱えていたのか、並びに析出された移住民の生態は如何なるものだったのかを次に検討しなければならない。

(c) 移住の原因

乾隆十年、湖南巡撫に着任した楊錫紱は、当地の状況を窺わせるに足る二つの奏言を行っている。第一の疏に言う。

湖南は洞庭に濱臨し、各属は多く湖濱に就きて堤を築き田を墾き、水と地を争う。常に衝決漫溢の憂有り。……滋生日に繁く、荒土は尽く闢かれて自り、愚民は遠計に昧ければ、往往にして水利を廃し田工を図る。独り大江大湖の濱、及び数里数頃の湖蕩、日に漸に築墾し、旧跡を失わしむるのみならず、自己の輸糧管業せし数畝の塘も亦た、土を培して田に改む。……本年湘陰、武陵等の邑、

各おの偏災有り。此れ皆、洞庭に濱臨し、湖を去ること稍や遠ければ、即ち水の接済無し。臣、確と査訪を加うるに皆、塘より田に改むること多きの故なり。[8]

大河川、湖の週辺では、洪水の危機を冒しつつも、「堤」を築いて土地を囲い込み、新たな田地が形成されていた。一方、洞庭湖からやや離れた地方では、小さなため池まで田地に変えてしまい、反って旱害の危機を招くことになった。清代も半ばに至り、湖広平原の人口は極度に肥大し、あらゆる手段を講じて田地の拡大が図られていた。しかし、それらは有効な処方とならなかったばかりか、災害として結果したのである。[9] こうした状況の下で「富戸」の土地集積が併せて進行しつつあった。楊錫紱の第二の疏に言う。

近日、田の富戸に帰するは大約十の五・六、旧時田を有せし人、今は倶に佃耕の戸と為る。毎歳入る所は、一年の口食に敷り難し。必ず須らく米を買いて接済すべし。[10]

人口増加による相対的な耕地の不足、及び富戸の土地集積により、零細な自耕地、或いは佃作による農業収入のみでは、再生産が不可能となる農民も現われたと考えられる。彼らは、何らかの形で現金収入の獲得を画らねばならなくなるだろう。

清代中期、四川と湖広の中枢部を結ぶ揚子江は、人口密集地域における食糧不足を備うべく四川から米殻を搬出する流通の大動脈として機能する。一方、過剰人口を抱えた先進開発地域たる湖広平原は、この時期までに綿布の一大生産地として成長しつつあった。[11] 従って、湖広から四川へは、手工業製品(綿布)が搬出されたであろう。この流通ルートを前提として、湖広と四川(三省交界地帯)の間を往復する行商群が析出された。[12] 揚子江を溯上して浸透する手工業製品(綿布)は、人口密集地域から溢れ出る零細な行商群の手によってもたらされたと考えられる。

さて、彼らを原藉から析出せしめたのは、土地に対する相対的過剰人口及び、その現象に拍車をかけた富戸の土地兼併に他ならなかった。故に彼らが土地獲得への強い渇望を抱いていたことを我々は容易に想像できる。当時開発途上にあっ

た三省交界地帯では比較的安価で土地を入手し得る可能性が存在していた。

庁の山疆は遠闊にして、地土も亦た広し。其の未だ開墾を経ざる地は、手指脚踏を以て界と為す。往往にして数両の契価もて地を買うこと数里・数十里に至る者有り。……本省は荒山たりと視るに、外省は転って楽土たりと視る所以なり。（道光『寧陝庁志』巻一、輿地）

ただし、彼ら季節的な行商の全てが最初から新しい「地主」として定着できるわけでもない。従って当時の三省交界地帯で活動した他郷出身者には、「佃戸」として定着していく者、行商、或いは旅回りの職人として原藉と山内を往復しつつ、常に移住民へと転化する契機をその生活形態に胚胎する者――必要な資金さえあれば土地保有者へと転化するだろう――とが混在していた。[13] 湖広から三省交界地帯への「移住」とは、清代における揚子江流通ルートの活性化を前提とし、季節的な往来を繰り返す零細な行商群の広範な活動を裾野として発生した現象であった。つまり、往来を繰り返しつつ、三省交界地帯にて土地、或いは耕作権を獲得し、家族を引きつれ次第に生活の基盤を移殖していくことが、「移住」と呼ばれる現象の主たる形態であった。

（d）移住民の帰住地における経済生活

移住民は一般的に夏季には、農耕に従事し、冬季には商業活動を営んだと考えられる。最初に、彼らの農業活動から見ていくことにしよう。

さて、移住民が未開の山林において土地、乃至耕作権を獲得した場合、彼らはまず土地の開墾から始めねばならなかった。移住民たちは、その課題を焼き畑農法の採用によって解決し、主としてトウモロコシの栽培を営んだ。トウモロコシはその栽培が比較的容易なため、乾隆中期以降の移住盛行の波と期を同じくして三省交界地帯に広まり、山谷を覆い尽くしたとすら言われている。[14]

収穫されたトウモロコシは、移住民の主食となった他、養豚の飼料として費された。移住民の経済生活は、トウモロコシ栽培と、それに付随する養豚を基軸として展開されたのである。[15] 四川省万源県には、「豕無ければ家を成さず」[16]という俗諺が伝えられていた。その理由は、「糞積肥料は農家の必ず需むる所と為る故に因る」[17]からだと言う。移住民は定着と同時に、主食として消費する以外のトウモロコシを投入して養豚を開始したであろう。その糞は肥料として用いられる故に、地力の低下による土地の放棄、結果として現象する移住民の再流浪を防止したと考えられる。

トウモロコシ栽培の短い夏の後、秦嶺山中、大巴山中等、三省交界地帯の中でも殊に自然環境の厳しい地方では、「八・九月間に至れば又、霏霏として雪下る」[18]長い冬を迎えた。積雪のために農耕が不可能となるこの時期、移住民は行商として山を下りていく。その場合に商品として扱われたものは、彼らの飼育した家畜の外、木炭その他、山内の特産物[19]であった。

以上、本章において考察した諸点を要約して示す。

(a)、三省交界地帯への移住は、清初より連綿と継続され、乾隆期にピークを迎えた。従って当初は広大な荒地を残していた三省交界地帯山内も、乾隆末から嘉慶初年には開発が行きづまり、むしろ相対的に土地が不足し始めたと思われる。(b)、移住民の析出地は湖広平原を中心とする。(c)、析出の原因は基本的には当該地域の相対的過剰人口にあった。(d)、移住の形態は、当初季節的に往来しつつ商業活動を行った人々の一部が、土地獲得の欲求に従って「定住者」へと転化したものであった。(e)、土地、乃至耕作権を獲得した移住民は、一般に夏季はトウモロコシ栽培とそれに伴う養豚に従事し、冬季は商業活動を営むべく山を下りていった。

① 例えば次のような事例がある。

乾隆二十年以後、始有外来流民。(嘉慶『雒南県志』巻一)

客戸則乾隆設府後賀来。(同治『恩施県志』巻七、風俗)

鈴木の見解は主として実録等の史料に拠っているが、地方志からも三省交界地帯への移住は乾隆期に顕著であったと窺える。

② 同治『鄖県志』巻二、輿地の項に「刀耕火種」なる語が見える。嘉慶『龍山県志』は、これについて次のように説明している。

方春視山可墾処、薙草伐木、縱火焚之。火熄土鬆。肥腴異常。謂

之燒畬。種殖雜糧甚茂、而包穀尤為大莊。府志載刀耕火種。（巻七、風俗）

その他「刀耕火種」については、渡部忠世、桜井由躬雄編『中国江南の稲作文化』日本放送出版協会、一九八四、参照。

③ 道光『巴州志』巻一、風俗の項に「梯田層疊、弥望青葱」と見える。

④ 孫達人「川楚予晓流民与陝南経済的盛衰」（『中国農民戦争史研究集刊』三、一九八三）。氏によれば、道光三年から光緒年間に至る漢中府の人口減少率は三七・三二％におよぶ。

⑤ 前掲、安野論文。

⑥ 譚其驤「中国内地移民史――湖南篇」（『史学年報』一―四、一九三二）。

⑦ 光緒『広安州新志』巻一〇、戸口

滋息既多、人満為患。地力雖殫、常苦衣食不給。……光緒中黔苗靖、有移家挈子入黔者矣。

⑧ 『皇朝経世文編』巻三八、「請厳池塘改田之禁疏」。

⑨ 清代中期における湖広の水利、及びそれをめぐる社会状況については、森田明『清代水利史研究』亜紀書房、一九七四、参照。なお、光緒『黄州府志』によると、黄州府を中心とする湖北東部では、乾隆二九・三二・三四・四三・四七・五〇年に水旱害の被害を受けている。

⑩ 『皇朝経世文編』巻三九、「陳明米粟之由疏」（乾隆一三年）

⑪ 藤井宏「新安商人の研究(一)」（『東洋学報』三六―一、一九五三）。

⑫ 移住民の多くは、小規模な交易を営みつつ、三省交界地帯へ流入している。

邱公、諱之杰、号澄斎。……自楚来川其時、雖陶朱業、而家無長物。及公長、懋遷有無三千余戟。遂以貨殖起家。（咸豊『雲陽県志』巻一一、芸文）

邱氏は乾隆年間に湖広より四川へ入り、商業活動に従事した。三省交界地帯において交易を営む湖広出身者は、その後ますます増大する。

貿販者、半係楚藉新民。（道光『新寧県志』巻四、風俗）

商賈半多客藉、道光初年多両湖人来巫。（光緒『巫山県志』巻一五、風俗）

⑬ 道光『城口庁志』巻六、風俗に

其旧外来入藉者、謂之客家。附近州県及湖広陝西江右之民、始則貿易、或佃耕、継則置業者居多。郷俗不同、土音各別。

とある。佃農にしろ、山内と山外を往復する行商にしろ、その目指す所は田産の所有（置業）であった。土地の獲得が叶えば、一時的な出稼ぎも移住民へと転化するだろう。

⑭ 前掲、安野論文参照。

⑮ 一例として、嘉慶『安康県志』巻一〇、建置の記事を挙げる。

因玉黍性難久貯、作酒、則糟可肥家、舟載裹樊、利亦数倍。故民争慫焉。

トウモロコシは長期保存が不可能なため、主食として消費する余剰分は必ず醸酒、養豚に投入された。他にも、道光『石泉県志』巻二、田賦、道光『紫陽県志』巻八、芸文、陳僅「勧諭広種紅藕蠶絲備荒示」にも同様の趣旨が述べられている。

⑯ 民国『万源県志』巻三、食貨。

⑰ 同上。

⑱ 厳如熤『三省辺防備覧』巻一一、策略。『三省辺防備覧』には一四巻本と一八巻本の二種が存する。一四巻本は、いわば厳如熤自身のオリジナル版、一八巻本は厳如熤没後に安康県の張鵬翮が増補したものである。本稿にて指示する巻数は、一四巻本に拠る。

⑲ 木炭については『三省辺防備覧』巻九、山貨に、

炭廠有樹木之処、皆有之。……冬春之間、藉燒炭販炭営生者数千

人。

とある。その他の山内特産品としては次のようなものが挙げられている。

紫陽之茶、平利之漆、洵陽之龍鬚草、皆專美利、以済農之不足。（道光『石泉県志』巻二、田賦）

移住民は農閑期（冬季）にこれらを販売するべく、彼らの析出地へ、或いは周辺の鎮市へと出かけたのであろう。

其佃地納租者、間或於農隙肩挑背負、補衣食之不足。（同治『鄖県志』巻二、輿地）

こうした移住民の生活を具体的に窺わしめる史料として、白蓮教反乱逮捕者の供述を次に掲げておく。

曾世興供。小的学名曾公允、年二十八歲。祖藉湖南、父親曾順武才撥在鄖陽府保康県居住、……小的曾世興于上年十二月内、因販売柴炭、前往襄陽。（中国社会科学院歴史研究所清史室、資料室編『清中期五省白蓮教起義資料』第五冊、江蘇人民出版社、一九八一、二五―二七頁）

高名貴供。年四十一歲、祖藉湖北襄陽県人、撥在雲陽県碉溪垻居住。……平日務農、並販猪生理。（同上書、五七頁）

第二章　三省交界地帯における地域社会の形成と変容――定住へのプロセス――

第二章以降では、第一章の予備的考察を踏まえた上で、移住民がその定着（定住）過程において如何なる社会関係を取り結び、如何なる秩序意識の下に地域社会を構築していったのかを検討しよう。この作業を経た後に、当時の移住民社会が直面せねばならなかった矛盾、即ち嘉慶白蓮教反乱への導火線が明らかにされるであろう。

（a）「同郷村落」の形成

畢沅の「興安州升府疏」に①

近年、四川・湖広等の省の人、陸続として前来し、荒田を開墾す。久しくして益ます衆まり、処処倶に村落を成す。

とある。乾隆期には、三省交界地帯へ大量の移住民が流入し、各地に多くの新しい「村落」が誕生していた。こうした村落は、先行する移住民のもとへ、後続する者が次第に依付しつつ、地縁的結合体として形成されていったものであろう。一般に、後続する者は、先行する者から土地を借り――或いは又借りし――佃戸として定着していく。つまり、その際に

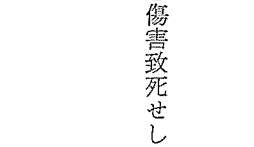
取り結ばれる租佃関係は、「村落」結合の核となる最も原初的な移住民間の人的結合関係を我々に開示しないだろうか。

厳如熤は、移住民の生態について次のように述べている。

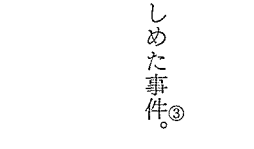
郷貫に遇有せば、便ち寄住し、地を写りて開墾す。木を伐り椽を支え、上に茅草を覆い、僅かに風雨を蔽ぐ。雑糧数石を借りて作種すること数年、収有れば山地を典当し、方めて漸次、土屋数板を築く。（『三省辺防備覧』巻一一、策略）

一般的に、移住民は同郷人に依付して佃戸となり、農耕が順調に進展すれば、土地を買い入れてそこに定着していったと理解できる。厳如熤の指摘は極めて示唆に富むが、幸いにも我々は、三省交界地帯山内における具体的な租佃関係の事例を記した史料を手にすることができる。乾隆刑科題本の中には、三省交界地帯で起きた裁判事件の記録がいくつか残されているが、その中に見える租佃関係を表にして次に示そう。（記号——→は土地貸与関係、═══は親族関係を表わし、□で囲まれた人名は確実に移住民であると判明している者を示す）。

(イ)、乾隆五九年五月二七日の題本、陝西省鎮安県にて王恒高が張明祥を傷害致死せしめた事件。②



(ロ)、乾隆二二年二月一七日の題本、湖北省房県にて劉惟然が王一迥を傷害致死せしめた事件。③



(ハ)、乾隆四一年六月一二日の題本、湖北省恩施県にて趙登栄が趙秉虔を傷害致死せしめた事件。④

ともに湖南澧州出身・同姓不宗

黄茂才→趙登栄→趙乗虔

(イ)、(ハ)の事例では先住の佃戸から更に土地の又貸しが行われているが、この場合、二人の移住民が共に同郷出身者であったことは注目に値しよう。(ロ)の事例では、湖北省穀城県出身の劉惟然が外甥の王一迥を頼って房県へ移住している。ただし、移住先における親族の消息が明らかであった場合を除けば、租佃関係は一般に同郷出身者間で結ばれたと思われる。即ち、移住民の定住過程、及びその延長上に考えられる村落の形成は、基本的に「同郷」の絆――それは、共通の言語(土音)、習俗を保持することに他ならぬ――によって果たされたのであろう。従って、乾隆期に入って新たに形成された村落は、同郷の絆によって種々雑多な姓の家族が集住する形態であったと想像される。こうした形の村落を仮に「同郷村落」と呼ぶことにしよう。次節で述べるように「同郷村落」は清末までには次第に解体へ向かい、「同姓村落」へと改編されていく傾向が現れる。

ただし、地方によってはこうした同郷出身移住民の集住するエリアが、かなり遅くまで残ることもあった。[5] やはり清代に大量の移住民を受け入れた四川省大足県の例を見よう。

本県の語言、旧くは極めて複雑なり。凡そ一般の人は率ね両種の語言を兼操す。平時、家人の聚談し、或いは同籍人の互話するは「打郷談」と曰い、粤人は粤音を操り、楚人は楚音を操り、其の人に非ざれば其の言を解せざるなり。外人(他郷出身者)と接すれば則ち普通話を用う。……惟だ中鹽場の玉皇溝一帯は、其の居民、原籍は湖南永州なるを以て両処に会同する者多きを為す。頗(しらがまじり)白の叟(おきな)は尚お郷音を能くし、改むる無し。(民国『大足県志』巻三、風俗)

移住民は一般に原籍での言語を数世代にわたって維持し続けた。大足県でもその状況は全く同様であったが、民国期に至り、学校教育の普及とともに「郷談」は次第に失われていったと言う。しかし、湖南永州からの移住民が集住した地区では、なお原籍の言語が維持され続けていた。

（b）「同姓村落」への変容

清末から民国期にかけて編纂された地方志は、三省交界地帯に同族聚居形態が広く存在したことを伝えている。それが一層純化された形態を取る場合、聚居した氏族の姓を村落名とする一姓一村の同姓村落を形成した。陝西、四川の地方志から各々史料を挙げておこう。

土著の民、聚族して居すること多し。一頓落毎とに宰ね一姓の拠る所と為る。他族の雑処する者有るは尠し。民、既に地を画して以て居し、其の生活も亦た往往にして状を異にす。（民国『渠県志』巻五、礼俗）

国朝旧くは土著少なし。明季の寇乱以来甘粛・四川・山西・湖北自り遷居する者、一姓の民は一郷に聚族し、即ち姓を以て其の地に名づく。……高氏の如きは高家村に聚居す。（民国『城固県郷土志』）

乾隆年間を中心とする移住盛行期、移住民は一般に家族を単位とする小規模な集団で流入したと考えられる。彼らの定住は、当初同郷の絆によって果たされていった。従ってその後、清末から民国期までの間に、多くの同郷村落は同姓村落へと改編されたと想定できる。同姓村落、及びこうした村落形態と相関する強固な同族結合の存在は、移住民の間に取り結ばれていった社会関係が到達した最終的な統合の「かたち」に他ならない。次に、同郷聚居から同族聚居へ到る過程、及び動機を検討する必要があろう。

帰住地にて成功を収め、「聚族」して居住を始めたある移住氏族の例を紹介しよう。

曾毓璉は故と湖南臨湘の人なり。康熙末に父の興韓、母の何に随いて来県し、故姻の李氏に依る。李も亦た湘の人なり。往て湘に在りて隣居し為る者なり。二年先んじて来県し、洞鹿甲に止まり、已に田を佃りて耕作したり。……韓、門外に豆稽を乗つる有るを見る。璉をして、李に之を得るを乞わしむ。之を簸するに余粒五升を得たり。復する所もて荒地数畝を乞う。日は人傭と為り、夜は荒を剷して瓜を種う。瓜、蕃碩し、秋熟は食を充たし、且つ瓜実三石を得たり。積すること数年にして十余石に至る。湘に運びて之を貨り、復た土物を買いて蜀に来るに、皆、高価を得たり。懋遷すること一紀を踰え、利を獲て豊に転じ、田数十畝、城東の街宅

数十区を買いたり。北郷の曾氏の大姓と称さるるは此れ自り始まる。乾隆初、居を梅子甲大地坪に移す。……曾氏の梅子甲に聚族せし自り後、元・海両房の子孫は日に蕃く、家も亦た日に富めり。(民国『雲陽県志』巻二八、士女)

曾興韓、毓璉父子は、康熙年間末に湖南省臨湘県から四川省雲陽県へ移住した。彼ら一家は、同じく臨湘県出身の李氏に頼り、佃農として「瓜」を作った。実った「瓜」は析出地たる湖南臨湘へ行商に出る際に携えられ、四川へ帰る際は湖南の特産品を持ち帰って商った。往来を繰り返すこと十数年に及び、遂に富を成して新たに梅子甲の土地を買い、その地に曾氏は「聚族」する。

当初、曾氏は、同郷・故姻の絆により李氏を頼って定着した。後、経済的上昇を果たした曾氏は、族人口の増加に伴い、新たに土地を買い求めて李氏から離れる。以上の事例により、同郷雑姓集団(同郷村落)からの有力氏族の離脱、その結果、離脱した氏族により形成される単姓集団(同姓村落)、といったモデルを仮定できるであろう。最初に移住民の共同性を形成する契機となったのは言語(方言)、習俗を同じくする同郷の絆であった。しかし、こうして形成された移住民の集住形態(同郷村落)は、内部の構成氏族の成長とともに次第に解体、分散へ向かう。十分な族人口と資力を有するまでに成長した氏族は、同郷集団から離脱して新たに同姓村落を形成するだろう。

ただし、同郷村落からいくつかの同族集団が生長、分離していった後も、析出地を同じくする同族集団間のつながりは容易に消滅しない。例えば、通婚関係は同郷出身氏族の間に取り結ばれたであろう。[6] 嘉慶元年に修された陝西省『雒南県志』には、

乾隆二十年以後、始めて外来の流民有り。……即ち買地落業の戸は、婚姻は必ず同郷を択ぶ。

と見える。また、同郷出身の移住民は、帰住地において「会館」を建置し、共同の祭祀を行った。(同郷結合のかたちについては後に更に詳しく検討しよう)。

同郷村落から同姓村落への改編は、移住民が自己の所属し得る最も基本的な社会関係を、次第に求心的に凝縮させてい

く過程でもあった。その結果として最終的に形成された、移住民の帰属し得る最も基本的な社会関係――厳しい自然環境、社会環境（例えば土客の争い）から逃避できる確固とした「殻」となるもの――とは同族結合に他ならなかった。それ故に同族結合は、三省交界地帯における移住民社会の到る処に生成したのである。ただし、こうした聚居形態を伴う同族結合の形成は、豊かな資力を持つ有力氏族において先行したであろう。更に、彼ら「成功者」は自生的に誕生した同族結合を組織として固定せしめようとするだろう。ここに「宗族」が誕生する。

① 厳如熤『三省辺防備覧』巻一四、芸文下。

② 中国第一歴史檔案館・中国社会科学院歴史研究所合編『清代地租剝削形態』下冊、中華書局、一九八二、七一三頁。

③ 同上、上冊、二八五頁。

④ 同上、上冊、三一四頁。なお、趙秉虔は乾隆三五年に、妻陳氏、父趙祖一とともに家族三人で移住している。

⑤ こうした状況は、本文に引いた大足県の外、南充県でも記録されている。

会龍場、在治東北九十里逢安界上、創自乾隆三十六年。共有鋪戸四百余家。……此場住戸自永州沅州遷来。（民国『南充県志』巻一、輿地）

⑥ 同郷出身の宗族は、先ず共通の「言語」によって相互に同一性を確認するだろう。

邑人多客籍少土著。当前清中葉時、凡本籍与本籍者、遇必各述其原籍之土語、曰打郷談。一以験真偽、一以表現親切也。父子兄弟互相伝習、以為紀念。（民国『宣漢県志』巻一五、礼俗）

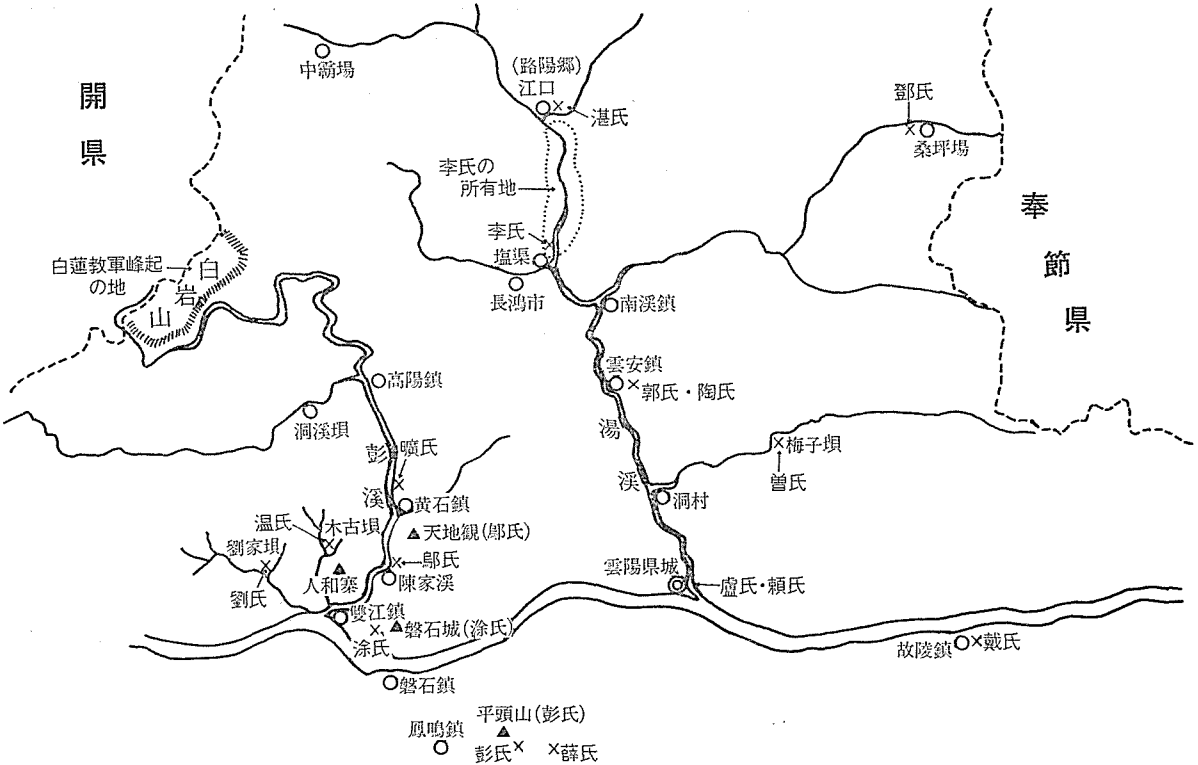
確認された同一性――彼らの絆を目に見えるかたちとして現象させる社会関係としては、取り敢えず会館における「共同祭祀」と宗族間の「通婚関係」を考えることができる。

歴時既久、習俗同化、漸通婚姻（其始、各省僑民、自為婚姻、不雑他族）。（民国『南溪県志』巻四、礼俗）

宗族間の通婚関係は「同郷」によって規定されており、その規制力は民国に入ってようやく緩み始めたほど強固なものだった。

第三章　四川省雲陽県における移住民社会の展開

前章にて行われた作業の目的は、広大な三省交界地帯の各地から摘出した史料に基づき、移住民による地域社会形成のモデルを帰納し、三省交界地帯への移住について一般的な見通しを提出することであった。本章では、三省交界地帯の一角に位置する四川省雲陽県という具体的な「場」においてモデルを検証し、併せて嘉慶白蓮教反乱前後の移住民社会の実



雲　陽　県　地　図

民国『雲陽県志』「雲陽県疆域全図」により作成。本文・註に引いた宗族のうち，族居地の確認が可能なもののみ示した。

像を些かなりとも復元してみたい。ここで特に雲陽県を取り上げる理由は次の二点である。第一は、特定の地域について微視的な解析を加えることが本章の目的となる故に、比較的史料に恵まれた地域を選定せねばならなかったこと、第二はこの県の西北部から「月藍号」を名のる白蓮教徒の一団が析出されていること、である。つまり、十八世紀以降、移住民社会として新たな秩序再編の途上に置かれていた四川省雲陽県の基層社会では、嘉慶白蓮教乱を醸成せしめる地殻変動が確実に進行していたと見ることができる。

（a）雲陽県の概況

雲陽県は、湖北省との省境に近く、揚子江の沿岸に位置し、県の領域は揚子江の北岸と南岸に分かたれる。比較的標高は低いものの、やはり山がちな地勢であることには変わりない。従って「民食は苞（トウモロコシ）穀を以て常膳と為し、次は則ち紅諸（サツマイモ）・洋芋（ジャガイモ）なり」[1]と言われるように、三省交界地帯の他地域と同じく、農耕地のほとんどはトウモロコシを栽培し得るのみに過ぎなかった。ただし、標高の低い平地――河川の流域に沿ってわずかに存在するのみである――では米作も可能であった。

> 稲田の肥瘠は一ならず。大氐、低田を貴び高田を賤しむ。……高田は瀋陂を恃み水を蓄う。平歳なれば常に給するも、旱なれば則ち継（つぐ）かず。且つ冷沙多く、糞を需むること尤も多し。買田は、低田の価の重きこと幾倍なり。……故に山高ければ則ち田少なく但だ苞穀・洋芋を種うのみ。（民国『雲陽県志』巻一三、礼俗）

低地の田価が山内の土地価格の何倍にも及んだことは、米が他の雑穀に対してはるかに高い商品価値を持ち得たことを意味するだろう。事実、清末までに、米は雲陽県から搬出される重要な商品の一つとなっていた。[2]

> 米糧を販運するは、之を斗載と謂う。先ず須らく囤積し、価を待ち価を視、舟運を起趺し、上下江に走りて之を售るべし。（民国『雲陽県志』巻一三、礼俗）

清代中期の湖広は、嘗て「湖広熟せば天下足る」と称された穀倉地帯としての地位を四川平原に譲りつつあった。湖広は、米穀供給地としての底の浅さを補うべく四川からの米穀搬入に依存せねばならなかったのである。[3] この情況を前提として揚子江流通ルートは活況を呈したし、雲陽県からも高価を期待し得る「商品」として生産された米穀が、少量ながら不断に搬出されたと想像される。その他にも、桐油、塩などが雲陽県の特産物として、やはりこの流通ルートを通して市場へもたらされた。塩業の中心は揚子江北岸の雲安鎮にあり、後に流入した移住民も多く製塩に携わることになる。

以上から明らかなように、雲陽県の地域経済は、揚子江に接岸するその立地条件ゆえに、当時の商品流通に大きく依存していた。ただし、それは雲陽県のみならず、三省交界地帯全域に共通する状況であったと考えられる。雲陽県をはじめとする四川省東北地方は、揚子江流通ルートによって沙市・武漢と、一方陝西省南部は、漢水流通ルートによって襄陽・武漢と緊密に結ばれていた。従って当時の三省交界地帯は、一面では厳しい自然環境に苦しめられる開発途上の「辺境」としての顔を持ちつつ、同時に、新たな展開を見せる流通経済の要衝となっていた。

さて、次に雲陽県への移住の概況を見ていこう。先に第一章で述べたように、民国『雲陽県志』には詳細な氏族表が付されており、民国期末まで続いた有力氏族については、その現住地、移住年代、原藉等が判明する。その中から移住年代の判明している氏族を摘出して分類してみよう。

明代及びそれ以前	三四氏
順治年間	七氏
康熙年間	三六氏
雍正年間	一二氏
乾隆年間	五四氏
嘉慶年間	一四氏

道光年間　四氏

雲陽県への移住は康熙以降盛んになり、やはり乾隆期にピークを迎えたようである。しかし、その後移住の波は消滅に向かったらしく、道光年間以後に移住して「有力氏族」となった者は皆無となる。移住民の析出地は第一章において確認したように湖広を第一とした。また、彼らの帰住地は、雲陽県の中でも揚子江北岸により多かったと言う。咸豊『雲陽県志』に、

邑は南北両岸に分かたる。南岸の民は皆、明の洪武の時に、湖広の麻城、孝感由り勅を奉じて徙来する者なり。北岸の民は則ち皆、康熙・雍正の間に外来し、籍を寄する者なり。（巻二、風俗）

と見える。県の揚子江南岸は、明初以来開発が進められていたが、それに対し揚子江北岸は、清代に新たなフロンティアとして開発の対象となった。南岸の地勢は山がちだが、北岸は揚子江へ流れ込む比較的大きな二つの支流（彭溪、湯溪）を擁し、その近傍には平野部が続いている。雲陽の米もこの二つの支流に沿う地帯で生産された。雲陽から米を搬出する拠点となった南溪市④も、やはり湯溪のほとりに位置している。彭溪、湯溪両河川は、その近縁地域が雲陽の経済的中心として発展するために、水利と交通の便とを提供した。しかし同時に、この地域は河川沿いである故に、本格的な開発の進展は、高度な治水技術を身につけた清代の湖広出身移住民に委ねられたのである。⑤

清代中期に続々と流入した移住民は、限られた平野部への定着をめぐって相互に競合せざるを得なかったであろうし、一方では土着民との軋轢にも耐えねばならなかった。

土著の民は田に券契無し。自ら、洪武年間に蜀に来たり、草を挽きて業を為せりと言う。……今、県境の扶、徐、向、冉、楊、譚、諸族は皆、其の子遺なり。其の始めは、頗る客民に仇なせり。（民国『雲陽県志』巻一三、礼俗）

他の移住民、或いは土着民との競合、そして県域の殆どがトウモロコシ栽培にしか適さぬという悪条件の下、移住民は経済的上昇を画る一方、自己の所属し得る共同性への模索を始めるだろう。その結果、彼らの取り結ぶ社会関係は次第に

凝縮し、ある「かたち」として実現されるであろう。

（b）同郷結合のかたち——会館をめぐって——

移住民は、帰住地において、各々出身地別に同郷会館⑥を設立している。各同郷会館は、それぞれ独自の祭祀対象を祀る「廟」の機能をも兼ねており、いわば同郷結合の象徴として存在していた。三省交界地帯の県城、大鎮には、必ずと言ってよい程、同郷会館が建置されていたことが地方志中より確認できる。しかし、多くの地方志はただその存在を伝えるに止まり、設立年代、設立主体、機能についての詳細は明確ではない。民国『雲陽県志』巻二一、祠廟の項にも、県内各地に存した会館の一覧表が掲載されているが、会館の実態を伝える稀有な史料と言えよう。

〈雲陽県会館一覧表〉

所在地	会館名	原註(設立年代，設立者)
城廂	万寿宮	……乾隆中江西幫建……
	長沙廟	……祀大禹，乾隆中湘幫建。
	帝主宮	……光緒12年黄州幫建。
	天上宮	……同治末年福建幫重修。
	南華宮	……嘉慶中粤幫修。
	陝西館	……西幫修。
	湖北館	……湖北幫修。
	岳常澧館	……三府人建修。
	衡永保館	……三府人修。
雲安鎮	万寿宮	
	廬陵館	
	禹王宮	
	帝主宮	
	万天宮	道光中蕭興発等修。
夔江鎮	帝主宮	
	天上宮	
	万寿宮	
	靖江宮	
鳳鳴鎮	禹王宮	乾隆53年孫斯大等建。
	万寿宮	乾隆53年劉致祥等建。
	帝主宮	
紅鹿郷	万寿宮	
	帝主宮	
南溪郷	禹王宮	
	靖江宮	同治初修。
	帝主宮	
	万寿宮	
長鴻郷	帝主宮	
	禹王宮	
	万寿宮	
高陽郷	禹王宮	乾隆23年叡建。
	帝主宮	嘉慶20年建……。
	万寿宮	嘉慶25年黄起昌等倡建……。
	安邑宮	嘉慶中建……。
	天上宮	嘉慶中建……。
白巌郷	帝主宮	
	万寿宮	
路陽郷	帝主宮	在江口場衆人建。
	禹王宮	

	帝主宮	在下垻橋。
黄農郷	斉安宮	
沙沱郷	斉安宮 万寿宮	皆乾隆時建。
盤石郷	万寿宮 帝主宮 禹王宮	
五龍郷	帝主宮 禹王宮	
雲龍郷	（記載なし）	
古陵郷	禹王宮 帝主宮 万寿宮 帝主宮 万寿宮	道光中戴華万倡修。 在古陵沱。 在石棹甲。 在宝興場。 在興安上甲。
恒合郷	（記載なし）	

民国期における雲陽県の行政区画は一七に分割されるが、そのうち九地区に禹王宮（湖広出身移住民の同郷会館）、一二地区に万寿宮（江西出身移住民の同郷会館）が建置されていた。また、帝主宮（湖北省黄州府出身移住民の同郷会館）に至っては県内一三地区、計一五箇所に及ぶ。

これら同郷会館の機能は、『雲陽県志』の史料が、各地に点在した会館を廟名にて記していることからも理解できるように、祭祀を以て第一とする。[7] 移住民の析出地と彼らの建置した廟の名称、及び祭祀対象の対応関係を、主要なものについて示せば次のようになる。[8]

湖北・湖南――禹王宮――大禹
湖北黄州府――帝主宮――張真人
江西――万寿宮――許真人
福建――天上宮――天上聖母（天后宮）（天后）
広東――南華宮――六祖
四川忠州――万天宮――（不明）

同郷出身者の会合、或いは「幫」（同郷連合の組織）の事務も会館にて行われた。例えば雲安鎮に所在した万天宮、帝主宮について県志はこう記している。

場に万天宮有り。忠人の公所為り。帝主宮は黄人の公所為り。祀神、飲福、平議、幫務は皆、是に於て之を行う。（民国『雲陽県志』

巻一〇、塩法）

こうした同郷会館の活動は、土着民や析出地を異にする移住民との競合の中で、必ず同郷出身者の団結を強固ならしめたであろう。しかし、ここで注意せねばならないのは会館が多く城鎮に置かれたことである。つまり、会館を建立・維持し、そこにつどったのは、城鎮に居住する地主、商人層ではなかったかと推定される。会館の建立年代が判明しているものを年代別に分類すると、乾隆年間――七、嘉慶年間――五、道光年間――二、同治年間――一、光緒年間――一、となる。乾隆末から嘉慶年間までには、会館を設立し得る社会的、経済的実力を持つ移住民地主、商人が城鎮に居住したのであろう。

乾隆からやや時代は下るが、道光年間、古陵沱鎮に禹王宮を設立した戴華万については、県志に列伝が付されている。経済的成功を果たした城鎮居住移住民の生態を考察する上において、大きな示唆を与えると思われるのでここに引用してみよう。

戴華万の字は楽村なり。父の秉福は黄安（湖北省黄州府黄安県）由り蜀に入り、県南の古陵鎮側の水田堰に居し、農を以て家を立つ。華万は其の長子なり。性は剛毅にして材幹有り。公共の利益を為す事を好み、労怨を辞せず。是より先、場の名は八間舗なり。皆、瀕江の細民にして、江の壩地を種して自給す。道光初、華万は始めて約して市を為し、一・四・七の日を以て相遥集に趁むく。漸に百貨を致し、賈区を増拓し、日に益ます袤広たり。遂に県南の劇鎮と為る。又、禹廟を市門に剏建し、其の庭廡を宏くし、交易の総匯と為す。内に申明亭を建て、朔望もて法を読む。廟外に石橋を造り、龍泉・荷池を濬して市人に飲ましめ、私銭を輟めて楽村義塾を立つ。（民国『雲陽県志』巻二三、士女）

古陵沱は大江に抵たる。居民は戴・江両姓多し。江に濱して市有り。居民は百余家なり。……市後に戴氏祠有り。（民国『雲陽県志』巻四、山水）

氏族表によれば戴氏が雲陽県へ移住したのは乾隆年間であった。彼ら一家は揚子江沿いの荒地で農耕に携わったが、ま

もなく経済的上昇――具体的には土地所有と思われる――を成しとげたのであろう。戴華万は道光初年に、一・四・七の日を以て定期市の期日と定め、商人を招き古陵沱鎮は隆盛に向かう。

民国期において総計百家あまりと言われる古陵沱鎮の人口構成については、戴・江の両姓が多かったと言う。また市後には、戴氏の宗祠が設けられていた。つまり、古陵沱鎮は雑姓集団として存在したのではなく、聚居形態を伴う少数の宗族を基本的成員として形成されたのである。また「市門」に禹廟が建置されていたことから、鎮を維持した主要宗族間の絆は、析出地の「同郷」によって結ばれていたのではないかとも想像される。

さて、戴氏をリーダーとして建置、維持された禹王宮＝湖広会館は、地域の経済的中心としても機能していた。揚子江の上、下流から搬入する、或いは古陵沱鎮から搬出される商品の取り引きは、禹王宮内で行われたのであろう。[9] こうした場合、有力な移住民地主、商人が同郷組織を利用しつつ流通経路を押え、市場に影響力――或いは支配力――を及ぼしたことも考えられる。

雲陽県に搬入される商品である(イ)綿布、(ロ)タバコ、及び雲陽県から搬出される(ハ)塩について、同郷組織との関わりを見ておこう。

(イ)綿布

大布、小布及び染色布は色布と曰う。皆、沙市自り来る。黄州・白洋・紫雲閣・祖師殿の諸目有り。……向きに楚人の専辦発售する有り。

嘉道中、此の県の商務営て大いに蕃盛なり。父老は、西関外の老街は皆、賈区にして、湘漢の人多しと言う。故に城の内外は、両湖会館多く、並びに〔湖南省〕岳常澧衡永保諸府の分館有り。其の業は、則ち棉布多き為りと云う。（以上、民国『雲陽県志』巻一三、礼俗）

(ロ)タバコ

烟草を業とする者、多く閩人（福建人）なり。頼・盧諸姓は皆、清中葉に来たり。其の業を以て県中に名あり。（民国『雲陽県志』巻一三、礼俗）

盧氏は烟・糖両店を兼営し、大いに蓄うる所有り。……諸県の烟・糖両業は、皆、郷人の交易有り。声気呼応して利率は自ら倍なり。（民国『雲陽県志』巻二六、士女）

嘉慶から道光頃、雲陽県で販売された綿布は、もっぱら湖広商人によって沙市からもたらされたと言う。その品目には黄州・白洋・紫雲閣・祖師殿等を数える。「黄州」とは、おそらく湖北黄州府からもたらされたことを意味するのであろう。また「紫雲閣」とは、長沙を中心に湖広で尊崇された水神、楊四将軍を祭る廟の名称には他ならない。[10] いずれも湖広商人と綿布の結びつきを暗示する。

一方、タバコは福建商人、それも清代中葉に移住した頼氏・盧氏が一手に扱っている。県志氏族表によると、康熙年間に福建汀州府上杭県から移住した頼氏の一族が県城内に居住していた。おそらくこの頼氏がタバコを扱った福建商人であろう。盧氏は道光年間に初めて雲陽へ移住したが、その原藉は頼氏と同じく福建汀州府であった。彼らが県城内の「天上宮」――即ち福建会館――を維持したこと、その経済的基盤は、福建幫による烟・糖の独占にあったことは間違いあるまい。

(ハ)塩

雲安廠にて塩を煮る者は皆、黄州（湖北省黄州府）の人なり。惟だ陶・郭二族のみ多為り。故に陶二千、郭八百の諺有り。（咸豊『雲陽県志』巻二、風俗）

雲安鎮の特産物である塩については、湖北黄州府から移住した陶氏、郭氏が、咸豊年間までに完全に掌握している。県志氏族表によれば、陶氏が雲陽県へ移住したのは康熙年間であった。一方、郭氏については移住年代の記載はない。雲安鎮に存在した「帝主宮」――即ち黄州会館――の建立主体であり、そこで「幫務」を取り行ったのは、製塩の利益を享受

し得た陶・郭二氏に他ならなかったであろう。

以上、会館の検討を通して、城鎮に居住した移住民地主――彼らの獲得した商業利潤も、結局は土地獲得の志向を満たすために費されたであろう――の姿が浮かび上がって来たように思われる。彼らは経済的中心地に宗族を形成して集住し、同郷結合の象徴である会館を建立、維持した。三省交界地帯各地においても、中国史上一般的な現象として存在した同郷組織(註)による特定商品の独占は、移住民社会の展開とともに急速に形成されていく。しかし、結局は流通の結節点たる城鎮――或いは場市――に居住した有力宗族のみが、彼らの間に取り結んだ同郷組織を利用し、ある特定の産業、乃至商品を独占的に扱うことに成功した。会館が盛んに建置されるのは、乾隆末から嘉慶年間にかけてであり[11]、それは、この頃――即ち嘉慶白蓮教反乱前夜――までに、上記の如き移住民地主が登場し始めることを意味している。

(c) 同族結合のかたち――宗祠と私案――

三省交界地帯では、乾隆移住盛行期の後を受け、到るところ聚居形態を伴う同族結合が形成されていく。こうした同族結合は、雲陽県の移住民地主の場合、如何に維持され、更に強化されていったのだろうか。県志その他を素材として、いくつかの移住宗族の軌跡をたどってみたい。また、別に雲陽県地図を付し、族居地の判明する宗族については、その居住地を示した。

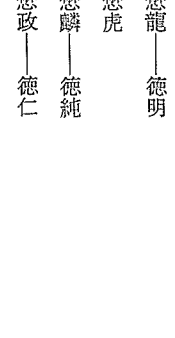
(イ)雙江鎮、涂氏の場合

涂開盛。字は懐安、湖北蒲圻県の人なり。乾隆二年、年十七にして、父の功亮に随い蜀に入る。雲陽にて北郷老龍坪に度地し、既にして貲を成したり。貲足らずして父に随い蒲圻に返り、之を措せり、未だ幾ばくもなくして父卒したり。廬墓すること三年、服除せらるれば、妻子を攜えて雲陽に徙り、居を老龍坪に定む。荆を披き、棘を斬り、良田数十頃を闢く。……子は三、懋龍、懋虎、懋麟。孫は徳明。徳明、字は慶元。性、純篤にして、父の懋龍を佐け、家政を理む。……商農並用し、歳入は益ます饒にして、遂に県

北の大戸と為る。……多金を捐し、宗祠を建て族譜を修む。（民国『雲陽県志』巻二五、士女）

雲陽涂氏の始遷祖とされる人物は、湖北蒲圻県西公塘出身の涂功亮である。彼は、「食指繁く、地窄く、歳穫は以て事蓄を贍すに足らざる」（『雲陽涂氏族譜』巻一九、功亮公伝）により、乾隆二年に子の開盛を連れて雲陽県へ移った。しかし成功を収めることは叶わず、一旦蒲圻県へと帰る。功亮が故郷で没した後、開盛は再び妻子を連れて雲陽県へと入り、老龍坪にて開墾に従事した。更に開盛の孫、徳明は、「農商並用」により、涂氏を雲陽県の「大戸」へと押し上げ、宗祠の建置、族譜の編纂を行った。

一方、民国一九年の序を持つ『雲陽涂氏族譜』によると、功亮・開盛父子が雲陽県に入る以前から、蒲圻県向家湾出身の涂開甯なる人物が、雲陽県小江鎮にて、商業活動を営んでいた。『雲陽涂氏族譜』の記載を信じるならば、涂功亮と涂開甯は族父子にあたる。族譜によってそれを図示しておこう。



涂功亮、開盛父子と涂開甯が、何時、何処で出会ったのか明らかにすることはできない。しかし、彼らは、涂氏の発展にとり重大な画期となった事業においてしばしば協力を行い、新たな同族結合の凝集を志向した。涂氏が帰住地で行った第一の大事業は、戦乱の際に宗族が立て籠るための私寨購置であった。

乾隆季年、吾が始遷祖たる懐安公は、譚氏従り之を購得す。未だ幾ばくもなくして、嘉慶教匪の乱に丁たり、族人は相聚りて保つなり。（『雲陽涂氏族譜』巻一八、「修磐石城後砦門記」）

涂氏は其の地（磐石城）を購得し、富者は多く寨を環りて田宅を営む。世乱るれば則ち族を聚めて寨に登り、自ら保つなり。（民国『雲陽県志』巻二三、族姓）

おそらく雲陽涂氏は、遅くとも乾隆末に私寨を購置するまでには族的結合を形成し、その後次第に寨の周辺に聚居していったと思われる。まもなく勃発した嘉慶白蓮教反乱の際には、涂氏一族は皆、寨に籠り、白蓮教軍に対抗したのであった。

次いで道光年間、彼らは寨の内部に宗祠を創建した。同治五年、開甯の孫、徳仁は、当時編纂された族譜の序にこう記している。

道光十五年、亮公の孫、徳明・徳純等、先年置く所の磐石城に在りて祠宇を創修せり。……因りて修祠の費用、銭一百六十八串を助く。（『雲陽涂氏族譜』巻一、「雲陽涂氏旧譜序」）

涂氏の場合、析出地においては各地に散居していた族人――涂功亮、開盛父子は蒲圻県西公塘に、涂開甯は蒲圻県向家湾に居住していた[12]――が、帰住地において相互に同族であることを確認し合い、宗族結合を固めていったのである。彼らは「農商並用」によって経済的基盤を確立した後、山寨を購置し、道光年間にはその山巓に同族結合の象徴たる宗祠を建立した[13]。

(ロ)鳳鳴鎮、彭氏の場合

彭宗義、字は会明、別号は義荘なり。父の自圭は、乾隆中に湖北大冶由り来たり、県南の泥溪甲に居す。傭作もて居積し、漸く農商を治む。田を購い、穀は百余石に至る。宗義は魁偉にして通敏、尤も精心に懋遷・化居を計り、時に応じて斂散す。身の産を増すこと四千余石に及ぶ。遂に宗祠を繕り、族を収め祭を展す。外に石城を為し、中に碉台九級を矗く。（民国『雲陽県志』巻二六、士女）

彭宗義の父、自圭は、乾隆年間に湖北大冶県から雲陽県へ移住した。移住当初は耕すべき土地とてなく、「傭作」とし

て働く日々であった。その後、農耕に携わるとともに、傍ら商業活動を営むに及び、彭氏は土地所有を実現して隆盛へと向かう。子の彭宗義は更に土地を集積し、所有地からの上がりは四千石以上にも達したという。また、彼はおそらく道光年間頃までには彭氏一族のために宗祠を建置し、私寨を備えた。民国編県志、山水の項に彭氏の山寨が描写されている。

東の兀亘たる高峯は平頭山と曰う。……其の上は平らかにして、田は五、六十畝あり。而して四壁は削りたる如し。大姓彭氏、醵金して隙を補い城と為し、避兵の備えを為す。……右下は厚漕江なり。坳口場に至りて新軍河に入る。溝の左は彭氏の老屋為り。彭義荘の祠有り。弥望の田廬は皆、彭氏の産なり。（巻三）

彭氏が河畔に存する「弥望」の水田地帯を占有したこと、その背後に険しい山寨を備えたことが見てとれるであろう。

(ハ)鳳鳴鎮、薛氏の場合

薛光秀。其の先は湖北大冶県の人なり。初め開県に徙り、乾隆初に乃めて県南の土門甲に遷る。耕鑿を以て家を起こし、曰に裕なり。彭氏と同里にして、一は山陰に居し、一は山陽に居す。彭も亦た大冶の人なり。両姓の子孫繁衍し、世よ婚姻を為せり。……募って紫雲閣を修し、里人の賽会の地と為す。費す所は数千緡なり。（民国『雲陽県志』巻二五、士女）

薛公光秀は邑の人なり。……族衆は無慮百数十家なり。（咸豊『雲陽県志』巻一一、芸文）

薛氏は湖北省大冶県から四川省開県へ移住し、次いで乾隆初年に雲陽県へ移った。雲陽県における帰住地は、先に取り上げた大冶県出身の彭氏と「同里」であり、彭氏と薛氏は代々通婚関係を結んでいる。また、宗族の規模については、咸豊年間における薛氏の総戸数百数十と記録されている。

この史料の中で注目すべきは、薛光秀が「里人の賽会」のために――つまり地縁結合の象徴として――「紫雲閣」なる施設を建置していることである。紫雲閣、或いは紫雲宮については、三省交界地帯の地方志中にしばしばその名が記録される。これは既にふれたように、湖広平原において信仰された水神、楊四将軍を祀る廟の名称であった。民国『雲陽県志』は、紫雲宮について次のような説明を加えている。

紫雲宮（原註、楊泗将軍を祀る。蓋し水神なり。船筏及び上下江に買（あきない）する者、之を奉ず）。（巻二一、祀廟）

本来湖広の水神であり、後には揚子江流通ルートにおいて商いする者に尊崇された楊四将軍の廟が、「里人」の祭祀のために設けられたのは何故であろう。それは「里人」の相当部分が、揚子江を上下しつつ商いしたであろう湖広出身の「移住民」だったからではなかったか。既に我々は、湖広からもたらされた綿布の中に「紫雲閣」と称されるものが存在したことを確認している。即ち、紫雲閣なる祀廟の存在は、ここに「里」と呼ばれている生活空間が、おそらく湖広から析出された移住民の集積を契機として成立したことを暗示する。この紫雲閣を中心とする地域社会は、当初同郷集団（同郷村落）として形成され、まもなく誕生した彭・薛といった有力氏族は同族聚居へ移行したのではないかと想像される。

また、薛氏も涂氏、彭氏と同様、族居地の中心に宗祠を設けているが、その建置年代については記載がない。

濤の右は新仏寺と曰う。大姓薛氏は之に世居す。薛氏祠有り。（民国『雲陽県志』巻三、山水）

(二)雙江鎮、劉氏の場合

民国編県志、山水の項は、家族聚居の地と、私寨、宗祠の位置関係についていくつか興味深い記事を残している。例えば雙江鎮の大族、劉氏については次のように記される。

劉氏聚族の地為り。因りて号して劉家塀と曰う。稲田は百畝に余り、山水は環抱して木古甲の最塀たり。右の山嶺に新建の石寨有り。中に劉氏祠を為（つく）る。（民国『雲陽県志』巻三、山水）

雙江鎮に居住する有力氏族で劉姓を名のる者は、県志氏族表に拠る限り、康熙年間に湖北麻城県から移住した一氏のみである。従ってそれが木古甲、劉家塀の劉氏であろう。

劉氏は百畝余りの水田を擁する「塀」＝川沿いの平地に集住していた。時期は定かではないが、その背後に私寨を建置し、涂氏と同じく山嶺に存する寨の内部に宗祠を設けた。

以上、涂、彭、薛、劉氏ら、四氏の移住氏族について、移住時（康熙――乾隆）から道光頃までの軌跡を概観した。ここ

から、移住氏族の上昇過程を特徴づける諸点を摘出し、ある共通の類型として帰納することが可能であろう。

(1)、彼らは当初「同郷」の絆によって定着したらしい。しかし、数世代を経た後の子孫の増大、或いは、帰住地にて「同族」と確認した集団との合流(例えば涂氏の場合)がもたらす族人口の拡大とともに同族聚居形態へと移行する。

(2)、こうした居住形態の変化は、経済的上昇過程——具体的には稲作水田地帯における土地集積に他ならぬ——に随伴して進められた。土地獲得資金は移住民の並行した商業活動に由来したであろう。移住民による大土地所有、即ち移住民地主の生成は、遅くとも乾隆末までに開始され、上記四氏の他にも、鄔、曠、李、謝、朱、湛氏等の移住民地主が出現した。彼らについては次に表を掲げる。

族居地	姓	移住年代	原籍	備考
雙江鎮	鄔氏	康熙	湖南省 湘郷県	涂氏とともに「県北の大姓」と称され、涂氏と通婚関係にあった。[14]
	曠氏	乾隆	湖南省 湘郷県	「農商を兼事し、漸に田宅を買い、富人と為る」。[15]
長鴻郷	李氏	康熙	湖南省 邵陽県	「塩渠自り路陽に至る延袤数十里の沃壌」を全て所有、白蓮教軍と戦った。[16]
南溪郷	謝氏	乾隆	湖南省 桃源県	始遷祖の謝大成は、「数千石に溢る」田を買い入れ、白蓮教軍と戦った。[17]
路陽郷	朱氏	康熙	湖南省 永州府	「買山墾田し、農を以て家を興す」。「府学増生」朱元復は団練を組織して白蓮教軍と戦った。[18]
	湛氏	乾隆	湖北省 麻城県	江口鎮に居住して「一里の望族と為り」白蓮教軍と戦った。[19]

ここに挙げた移住民地主は、いずれも康熙から乾隆年間にかけて、雲陽県の揚子江北岸に移住している。しかも、彼らの族居地は、彭溪・湯溪両河川に沿う地域であったと考えられる。例えば、長鴻郷李氏は、湯溪河川沿いに延々と連なる

塩渠から路陽までの「沃壌」を所有したという。また、南溪郷（雲陽県の米穀搬出の中心であった南溪市一帯）謝氏は、乾隆初年に移住し、嘉慶白蓮教反乱勃発までに千石以上の「田」を獲得している。嘉慶白蓮教反乱前夜、雲陽県の平原地帯は、県南・県北とも移住民地主によってほぼ全面的に開発、兼併されていた。

(3)、移住氏族は経済的基盤を固めた後、宗祠の建置、或いはそれに付随する祭田の設置[21]、族譜の編纂等に着手している。ここに取り上げた涂、彭、薛、劉氏の他にも宗祠の建置はいくつかの移住氏族において確認できる。例えば雲安鎮にて製塩に従事した郭氏の場合、乾隆年間に移住した郭在鳳が既に宗祠を建置していた[21]。それより時代は下がるが、雲安鎮陶氏は、嘉慶年間の人、陶啓潢が宗祠を建造し[22]、更に咸豊年間に長鴻郷李氏[23]、同治初年に雙江鎮鄔氏も宗祠を建造する[24]。以上の事例により、移住氏族はその経済的条件が満たされた場合、同族結合の象徴たる宗祠を建置し、族的結合を強化する方向性を志向したと言えよう。換言すれば、帰住地の厳しい自然、社会条件の中から自生した同族結合を、制度として固定せしめ、宗族組織へと改編していく努力が払われたのである。「宗族」の理念が現実の組織として具現されていくこの過程において、「宗祠」は完結した円環＝宗族組織の欠くべからざる一点として存在せねばならぬのではないか。夙に牧野巽は、「宗祠を建立することが、中国の宗族生活の一つの理想であり、一つの完成を示す[25]」と論じ、移住氏族の場合は「住地に宗祠を有するか否かによって、遷居を完成したか否か[26]」を区別する観念が存在したと指摘する。だとすれば、宗祠の建置は、氏族の移住が完結したこと、及び帰住地におけるステイタスの確立を意味するものであろう。実際、宗祠の建置と維持は、相当の資産を持する大姓にのみ可能な事業だった。

> 呉庭舜、字は猷智。父の天麟は麻城（湖北省）由り県南の馬嶺へ徙る。……家、僅かに中資なるも独り宗祠を建つ。亦た、人の難き所なり。（民国『雲陽県志』巻二五、士女）

(4)、この地方には、明末農民戦争以来の山寨が各処に残されていたが、有力な宗族は、族居地――一般に「坝」と呼ばれる水田地帯――の背後に山寨を確保した。宗族によって私有される山寨の数は嘉慶白蓮教反乱以後に爆発的に増大した

と思われる。しかし、既にそれ以前から私寨購置の動きも認められた。(涂氏の場合)。嘉慶白蓮教反乱時に施行された所謂「堅壁清野」(住民とその財産を山寨へ避難させ、白蓮教軍の補給路を断つ策)は、こうした地域社会の動向によって基礎づけられたものであった。また、山寨の内部に宗祠を建置するケースも確認された。山寨は民国に入ってその使命を終えるまで、単に兵乱から宗族の安寧を保障したのみならず、宗族理念を象徴する「礼教」の砦として屹立し続けたのである。㉗

① 民国『雲陽県志』(以下、民国志と略称)巻一三、礼俗。

② この点は三省交界地帯の他地域についても同様であった。
穀米販輸出境、幾偏巴蜀。富人坐擁倉箱、称雄郷里。往往有積年陳穀、因循滞罄。一遇歉歳則倍利矣。(光緒『広安州新志』巻一三、貨殖)
有力者於稲未刈穫、乗窮民空乏、賤価預糴、名曰買青。蓋即五月糶新穀之計。……此皆郡城富商大賈所営。謀蔵下裏獎、其利数倍。(嘉慶『安康県志』巻一〇、建置)

③ 安部健夫『清代史の研究』創文社、一九七一。

④ 民国志、巻三、山水
南渓市(距城五十里)。市民三百余家。貿以米塩為大宗、県東北大聚也。
また、民国志、巻一三、礼俗
米以南渓産為最上。

⑤ 前掲、安野論文二〇六頁に引用された厳如熤『三省辺防備覧』巻九、民食の記事は、この点について貴重な示唆を与えてくれる。

⑥ 三省交界地帯における会館について論じたものとしては、何炳棣『中国会館史論』学生書局、一九六六、及び呂作燮「試論明清時期会館的性質与作用」(南京大学歴史系明清史研究室編『中国資本主義萌芽問題論文集』一九八三)等が存する。

⑦ 民国『渠県志』巻五、礼俗に
渠人自他省遷居者、各有其会館之祭祀。
とある。また、光緒『広安州新志』巻三四、風俗の項には、各会館の祭祀期日が記されている。その日には、各会館にて「賽会演劇」があったという。

⑧ 何炳棣、呂作燮両氏の著作を参考にしつつ、民国『達県志』巻九、民国『合江県志』巻四、乾隆『興安府志』巻一七、嘉慶『漢陰庁志』巻三、等によってまとめた。

⑨ 会館で取り引きが行われたことは、他地域でも認められる。
輸出清道咸時、以麻為大宗。故江西麻幫万寿宮麻市、今猶可攷。(民国『宣漢県志』巻一五、礼俗)
禹王宮(康熙五十年建。……今為南路米市)。(民国『達県志』巻九、礼俗)

⑩ 黄芝崗『中国的水神』(国立北京大学・中国民俗学会『民俗叢書』)、一九三四、参照。

⑪ 四川・湖北の会館建立動向に関しては、何炳棣前掲書に詳しい。陝西に関しては、漢陰庁、石泉県の例を挙げる。
(イ)、漢陰庁(嘉慶『漢陰庁志』巻三、建置による)。
山陝会館——乾隆三二年建、湖南会館——乾隆四六年建、江西会館——乾隆三八年建、湖北会館——乾隆五三年建。
(ロ)、石泉県(乾隆『興安府志』巻一七、祠祀による)。
江西会館——乾隆四八年建、黄州会館——乾隆四三年建。

⑫『雲陽涂氏族譜』巻一、遷地紀。

蒲圻西公塘族宏亮、向家灣族開甯、潮江而上僑於夔州之雲陽。宏亮開甯於序族父子、而同出於一鵬。

⑬ その他、寨の内部に宗祠を備えた例として、康熙年間に湖北から移住した南渓郷鄧氏、同じく康熙年間に四川省奉節県から移住した夔江鎮温氏が挙げられる。

(イ)鄧氏

鄧氏湖北某県人、康熙中遷桑坪甲。（民国志、巻二三、族姓）

桑坪塊有市、市民市民六十余家。市西有太平寨、即鄧氏祠。（民国志、巻三、山水）

(ロ)温氏

木古塊有田三四百畝、族居温氏占十七八。（民国志、巻三、山水）

人和寨（在三台山。温氏同附近衆姓共建）。（民国志、巻六、阨塞）

温氏祠（在三台山）。（民国志、巻二三、族姓）

⑭ 民国志、巻二三、族姓に

県西大姓、南称彭薛、北則鄔涂。其先皆楚人、遷蜀且百余年。世富厚田畝相接、互為姻婚。其於居積若天性。

と見える。民国期には、鄔氏は夔江鎮において、同心寨・得勝寨・鄔家寨・華家寨・天地観寨・易家寨の六寨を所有していた。（民国志、巻六、阨塞による）。

⑮ 民国志、巻二七、士女。

曠希賢、字国士、原籍湖南湘郷人。乾隆中祖宗顔始徙達州、父聖明転徙川東、至県北黄石甲遂定居。兼事農商、漸買田宅、為富人。

⑯ 民国志、巻二五、士女。

李茂亮、字有邦、其先湖南邵陽県人。康熙四十四年、徙県北之黄村。……治産業、買荒地、招佃墾、殖積数十年、自塩渠至路陽延袤数十里沃壤相属、遂為県北著族。子自武。

自武、字純恕。……嘉慶三年、教匪王三槐等拠県北安楽坪為乱、防禦得力、官民賴之。

⑰ 民国志、巻二七、士女。

謝大成、字玉振。祖文生、父帝倫、乾隆六年、由湖南桃源県来、居孫家上甲。……歴久愈阜、買田至溢千石。……嘉慶二年、弟大有被匪脅擄時、大成避難百丈虆、聞変急不顧身、率衆往救。

⑱ 民国志、巻二七、士女。

朱元復、路陽甲人。曾祖万倖、康熙中由永州入蜀止新甯、旋遷此居。歴祖父両世、買山墾田、以農興家。至元復始読書、入学為府学増生。嘉慶中王三槐踞安楽坪……元復聯里中鄧甘両族、率子弟農佃、扼隘守衛、並各輸千金助軍。

⑲ 民国志、巻二八、士女、湛子良。

清世有応甲者、由湖北麻城遷蜀、居県北江口鎮。四世至恆升、以勤儉興家……為一里望族。

また民国志、巻二五、士女。

湛恆升、路陽人、……王三槐之乱、居民転徙流離。恆升於河洲街築層楼、又於九龍坡建青雲寨、郷鄰賴以安堵。

⑳ 民国志、巻二三、族姓によると、民国期の県内に計一六〇の宗祠が存在したと記録される。このうち、涂氏祠、鄔氏祠、彭氏祠、薛氏祠を含む三二の宗祠に、族産、祭田が付設されていた。

㉑ 民国志、巻二六、士女。

郭在鳳……乾隆中来雲安場、業塩井致富。

また、民国志、巻二三、族姓。

郭氏祠（郭在鳳捐修）。

㉒ 民国志、巻二五、士女。

陶啓潢、字漢章。……陶氏族自乾嘉間入蜀、繁衍至数千口。啓潢

捐千金、修祠纂譜、置戸長族長房長、以統攝之。

㉓ 民国志、巻二五、士女。

〔李〕鴻齡、字立初。……咸豊間……修譜建祠。

㉔ 民国志、巻二三、族姓。

鄔氏祠（同治年間鄔信義建）。

㉕ 牧野巽『近世中国宗族研究』（牧野巽著作集、第三巻）、御茶の水書房、一九八〇、二〇三頁。

㉗ 同上書、二一〇頁。

㉘ 『雲陽涂氏族譜』巻一一、族範。

族中子弟、不得為僧道、並学習各種邪教、違者、入祠懲処、並勒令改正。

おわりに

本稿で検討すべき課題として設定されたのは、第一に、清代中期における大規模な移住民流入の結果、混沌とした三省交界地帯各地の地域社会は如何なる社会統合へ向けて収斂されていったのか、その志向性の所在を問うことにあった。第二に、混沌（移住）から秩序（定住者の社会体制）へと凝結していく過程の中で生じる矛盾――即ち、嘉慶白蓮教反乱を用意した社会条件――の実相を見極めることであった。

前者については次のような見通しを提出し得る。移住民の定住は当初同郷集団（「同郷村落」）への参入という形をとるが、構成単位である個々の「家」が「族」へと膨張するに至り、次第に解体、分散し、同族聚居形態へ移行する。こうした聚居形態を伴う強固な同族結合の生成は、移住民が自己の帰属し得る最も基本的な社会関係を精錬していく過程に他ならず、三省交界地帯の到る処において顕在しつつあった。まもなく――乾隆末頃までには――この中から有力な移住民地主が誕生する。彼らは、移住地における厳しい自然・社会環境の中から自生的に結ばれた同族結合を、中国史上つねに理想とされた規範的組織――即ち「宗族」へと改編する努力を行った。清代中期以降、盛んに建置された宗祠・私塾は、彼ら移住民地主が意識的に選択した方向性を跡づける指標となろう。

さて、こうした移住民地主の誕生は、三省交界地帯の地域社会において如何なる矛盾を生じせしめたのであろうか。次

に移住民地主の経済活動を中心に概括しておこう。

移住民地主は河川沿い平原地帯において、或いは荒地を開墾し、或いは既に開かれた土地を買い入れることによって大土地所有を実現していく。その場合、土地獲得資金は、彼らの並行した商業活動に由来したと考えられるが、それにしても彼らの土地集積は余りにも急激に進行している。例えば彭氏の場合、始遷祖の彭自圭は傭工から身を起こし「百余石」の田を購得、更に子の彭宗義は「四千余石」もの田を所有する。他にも康熙から乾隆にかけて「白手（むいちもん）」にて移住し、乾隆末頃までに大土地所有に至った移住民地主の例は多いが、その驚異的な成功を我々はどう考えたらよいのだろうか。おそらく彼らはその商業活動において、同郷結合をテコとした特定商品の独占を行い、高い利潤を獲得したのではないだろうか。

河川沿い平原部では、移住民地主の開発、定住とともに、彼らを核とする新たな経済的社会的中心（場・鎮）が形成される。彼らは、水運の要衝となる場・鎮――即ち、収斂された地域経済が外部へと接続していく結節点に位置し、各々「同郷」出身の客商とネットワークを形成したであろう。つまり、場・鎮へ太い「束」となって収斂される地域経済は、彼ら移住民地主の手を経ることにより、外部の回路と接続することが可能になったのである。従って同郷組織による特定商品の独占は、結果的に見れば河川沿い平原部に居住する有力宗族の独占へと帰結した。

ところで三省交界地帯の開発が、平野部・山間部を問わず飽和状態に近づくのは、乾隆末から嘉慶初年であったことを想起しよう。この時期、既に大規模な耕地拡大は期待できない。こうした状況のもとで有力氏族による特定商品の寡占体制、平野部における土地集積は進められていく。従って移住民地主誕生の陰には、必ず土地を売却せざるを得ない――乃至、山間部（トウモロコシ地帯）から平野部（米作地帯）へと上昇する道を途絶された――同族集団を、或いは有力氏族の押えた流通経路から排除されていく同族集団を析出したはずである。山間部と平野部の社会的経済的較差――それは、当時の三省交界地帯が、既に流通経済に組み込まれた移住民社会であった故に、より尖鋭な形で現象したであろう。①

こうした「同族集団」間における分極化の結果として、二つの方向性が展望されよう。一つは、宗祠、私塾を備えた宗族組織へと向かう同族集団であり、もう一つは、経済的基盤(土地、商業ルート)を浸蝕され、族的結合自体が危機にさらされていく同族集団である。現実的基盤の狭隘性故に彼らは宗祠を持つことができない。そして彼らの同族結合は族人個々の生存を保障する確固たる「殻」でもなくなるだろう。嘉慶白蓮教反乱における対抗関係は、宗族組織(「礼教」)を構築していく同族集団と、存立の基盤自体を堀り崩され、白蓮教(「邪教」)へと組織されていく同族集団との間に存在した。

さて、第三章でその生態を明らかにした移住民地主の多くは、紳士身分の獲得へ向かい、清末には「紳糧」[2]と称される四川独特の「郷紳」層へと変貌していく。彼らは相互に緊密な結びつきを持ち、民国期に至るまで長期にわたって県政に大きな影響力を持ち続けた。例えば次のような事例が記録されている。

> 故事に、毎歳秋初、県令は筵を肆ね、城郷の紳糧(原註、俗に冠帯を襲う者を謂いて紳士と為す。田租有る者は糧戸と曰う。統せて紳糧と称す。)を束速し、官舎に至らしめ税率銀価を平議するあり。之を議糧と謂う。(民国『雲陽県志』巻九、財賦)

因みに、我々に多大な情報を提供してくれた民国『雲陽県志』の主任編纂者は、郭在鳳(湖北省黄岡県から移住、雲安鎮にて製塩業に従事)から四代目の子孫、郭文珍(光緒二八年挙人)であった。[3] 一方、県志序文は涂氏の子孫、涂鳳書(光緒二九年挙人)が寄せている。その他、鳳鳴鎮彭氏(湖南省湘郷県から移住)の子孫、彭宜譲[4]・雙江鎮曠氏の子孫、曠仕棠[5]も、それぞれ監修・繕校員として県志纂修職員の中に名を連ねている。

移住民社会は同郷結合、同族結合を結節点とする地域社会へ向けて次第に統合されていくが、以上の諸社会関係を基盤として移住民地主の経済的上昇、支配階層への転化が果たされた。移住民流入が開始された清初から清末にかけての長い射程で見れば、嘉慶白蓮教反乱は、混沌とした移住民社会が、次第に冷えて凝固し、「紳糧」を基軸とする社会体制として完成されていく時に生じる歪み、亀裂に淵源する激震であったと考えられる。

尚、本稿では、乾隆末期の諸矛盾が押し寄せる山内において白蓮教反乱集団を形成していく同族集団の具体的動向[6]、及

び、所謂「紳糧」を基軸として維持された社会体制⑦について検討することはできなかった。今後の課題として確認しておきたい。

① 本稿と同じく三省交界地帯を対象として、明末における移住と宗教反乱の問題を扱ったものに、大沢顕浩「明末宗教的反乱の一考察」（『東洋史研究』四四―一、一九八五）がある。氏によれば、明末の「災害や差役の過重」により析出された移住民の多くは、発展しつつあった銀礦採掘に礦徒として従事した。一方、宗教結社は、彼ら礦徒集団との連携を画ったとされる。明末と清代中期とでは、各々の歴史段階に規定され、移住の形態・移住民社会内部の矛盾は異った姿を見せる。清代の移住と移住民社会における矛盾の生成は、明末に比し一層大規模に展開した流通経済の存在を前提としたのである。

② 「紳糧」については、久保田文次「清末四川の大佃戸」（『近代中国農村社会史研究』大安、一九六七）参照。

③ 民国志、巻三、士女。
郭文珍……塩場耆宿在鳳曾孫。

④ 民国志、巻四三、文録下、郭文珍「彭母郭孺人墓表」による。なお、郭文珍の妹は彭宜誠に嫁していた。

⑤ 民国志、巻四三、文録下、涂鳳書「礦琢章先生墓志銘」による。なお、礦仕棠の父、礦玉相は、涂鳳書の「読書」の師であった。

⑥ 四川省巴州の反乱軍については「其夥党尽係同族親隣」（『清中期五省白蓮教起義資料』一、三〇七頁）と報告されている。巴州教軍は、苟氏、及び苟氏と通婚関係にあった羅氏を中核として構成された。四川省通江県の教軍は冉氏を、湖北省長陽県の教軍は覃氏、及び通婚関係にあった譚氏を主たる構成員とする。反乱の鎮圧者たる移住民地主と同様、白蓮教軍も同族集団を基盤として生成された。この点については稿を改めて論じたい。

⑦ 四川の郷紳が結集した、地域支配の拠点とも言うべき清末の「局所」（公局）については、小野信爾「四川東郷袁宗始末」（『花園大学研究紀要』四、一九七三）、西川正夫「辛亥革命期における郷紳の動向」（『金沢大学法文学部論集・史学編』二一、一九七五）、新村容子「清末四川省における局士の歴史的性格」（『東洋学報』六四―三・四、一九八三）等の研究がある。

（名古屋大学大学院生　　）

The Immigrant Societies under the *Qing* 清 Dynasty

——An Introductory Study of the *Bailian-jiao* 白蓮教 Sect Rebellion in the *Jiaqing* 嘉慶 Period——

by

Masaru Yamada

From the end of the 17th century to the end of the 18th century, there were many people exuded as immigrants from some advanced provinces, with *Hukuang* 湖広 as their center, to the boundary region among *Sichuan* 四川, *Hubei* 湖北, and *Shanxi* 陝西. In this region the Bailian-jiao sect rebellion broke out and it is generally considered that this rebel army was composed of the immigrants. In this paper, the author tries to make clear the process of organizing the immigrant societies and the social problems causing the rebellion.

The immigrant societies which were at first composed of some associations from the same province, came to be reorganized by kinship. By the end of the *Qianlung* 乾隆 period some large landowners became powerful and monopolized the channels of economic circulation in the plain. And they tried to organize the family relations into the *Zongzu* 宗族 system. On the other hand, the mountaineers under pressure came to crisis of losing their own family relations. These conditions prepared for the large social change in the first year of the Jiaqing period.

The Settlement of the Southern Ukraine and the Zaporozhian New Sich

by

Hitoshi Nakamura

The subject of the present article is the colonization of the Southern Ukraine during the Zaporozhian New Sich period. The eighteenth-century Southern Ukraine was composed of two parts. One is northern